

天の時、地の利、人の和

～ 関西学院第2代院長 吉岡美国 ～

天の時、地の利、人の和

～ 関西学院第2代院長 吉岡美国 ～



【愛誦の聖句】ヨハネの手紙一 5章4節

池田裕子



Kwansei Gakuin Archives

関西学院 学院史編纂室

I. 写真でたどる吉岡美国の生涯 ----- 1頁

1. 少年時代 -15歳頃 (1877年頃) -
2. ヴァンダビルト大学留学 -29歳頃 (1891年頃) -
3. 南メソヂスト監督教会日本年会 -32歳 (1894年) -
4. 普通学部とソテツ -38歳 (1900年) -
5. プランチ・メモリアル・チャペル -42歳 (1904年) -
6. 吉岡美国一家 -43歳 (1905年) -
7. 正装した吉岡院長 -45歳 (1907年) -
8. 日露戦争戦捷記念碑 -47歳 (1909年) -
9. 神学館定礎式 -49歳 (1911年) -
10. 大隈重信来校 -51歳 (1913年) -
11. 欧米訪問 -52歳 (1914年) -
12. 創立者ランバスを原田の森に迎えて -57歳 (1919年) -
13. 創立者ランバスの父の墓前 -59歳 (1921年) -
14. ニュートン第3代院長の帰国 -61歳 (1923年) -
15. 結婚記念 -76歳 (1938年) -
16. 上ヶ原キャンパスの3院長 -78歳頃 (1940年頃) -

II. 吉岡美国の遺品 ----- 18頁

1. 英文タイプライター ♪ 校歌「空の翼」誕生秘話 ♪
2. ご夫妻胸像
3. 日本メソヂスト神戸中央教会創立五十年記念新約聖書
4. 拡大鏡
5. 出席簿

III. 吉岡美国の肖像画と胸像 ----- 23頁

1. 肖像画
2. 胸像

吉岡美国の生涯とその思想については、井上琢智「吉岡美国と敬神愛人」(1)～(6)『関西学院史紀要』第6～10, 12号(2000～2004, 2006)をご参照ください。「関西学院大学リポジトリ」<http://kgur.kwansei.ac.jp/dspace/handle/10236/2067>からもご覧になれます。

なお、表紙の揮毫「信能勝世」(「甲東」は吉岡の雅号)は、武用光一さん(お祖父様、ご尊父とも吉岡の教え子)から2009年にご寄贈いただいたものです。

I. 写真でたどる吉岡美国の生涯

1. 少年時代 -15歳頃 (1877年頃) -



吉岡美国は、文久2(1862)年9月26日、父鍬次郎(美種)、母幾久子の長子として、京都で生を受けました。家は代々町奉行所属の同心を務めていました。

父の勧めを受け、「英語学校」(後の京都府中学校)で学んだ美国は、明治天皇の学校訪問に際し、表彰されるほど優秀でした。「英語学校」では、アメリカ海軍士官ポールドウィンが会話、習字から、最終的にはバレーの歴史書を頂点とする「星学、地理学、リードル、会話書、翻訳、算術」などを教えていました。ここから、平井金三、伊藤小三郎、藤岡勝二等多くの言語学者が誕生しました。

2. ヴァンダビルト大学留学 -29歳頃 (1891年頃) -



1880(明治13)年3月、京都府中学校を卒業した吉岡は、同校の助教諭として5年間働いた後、ポールドウィンの紹介により、神戸の居留地にあった兵庫ニュース社に入社しました。神戸で日本伝道を開始したばかりのアメリカ南メソヂスト監督教会宣教師J. W. ランバスとその息子W. R. ランバスに出会います。病気のため1年で新聞社を退社した吉岡は、ランバス父子との交流を通じ信仰を得て、関西学院の創立に協力しました。

関西学院創立後の1890年、アメリカ・テネシー州ナッシュビルのヴァンダビルト大学神学部に入學。2年前に結婚した妻を日本に残しての留学でした。吉岡は前列右から2人目です。



3. 南メソヂスト監督教会日本年会 -32歳 (1894年) -



1892(明治25)年にヴァンダビルト大学を卒業した吉岡は、帰国し、関西学院第2代院長に就任しました。これは、1894年8月に関西学院で開催された南メソヂスト監督教会日本年会の記念写真です。吉岡は前列左から3人目です。

一家はキャンパス内の住宅に住み、家族ぐるみで生徒たちの世話にあたりました。病気で入院した寄宿生が次々に命を落とした時、「もう殺さない、わしの家で自分で看護してなおす」と言って、腸チフスにかかった日野原善輔(本学名誉博士である日野原重明聖路加病院名誉院長ご尊父)を戸板に乗せて引き取り、3ヶ月半にわたって自宅で手厚く看護しました。



山内一郎理事長(右)、平松一夫学長(左)と共に吉岡美国展をご覧になる日野原重明さん(2006年9月)。吉岡美和さん(吉岡院長ご令孫)によると、日野原重明さんをご自身の大学時代の恩師だそうです。

Photo by Takayuki Takebayashi

4. 普通学部とソテツ -38歳 (1900年) -



1889(明治22)年に神学部と普通学部から始まった関西学院は、徴兵猶予の適用もなく、上級学校進学に必要な中学校卒業の資格も与えられていませんでした。普通学部が中学校と同等以上と文部省に認められたのは1902年2月のことです。中学部への改称認可は1915(大正4)年でした。

こうした経緯の中、1899年に出された文部省訓令第12号(聖書と礼拝を放棄しなければ、前述の特典を与えないというもの)は、キリスト教主義学校の存続を脅かしました。吉岡は、圧力に屈することなく、「聖書と礼拝なくして学院なし。特典便宜何ものぞ。例え全生徒を失うもまたやむを得ざるなり」と言い放ちました。

1900年3月の普通学部卒業生は6名でした(最前列、右端を除く)。吉岡は前から2列目の中央にいます。その後ろに、第5代院長となった神崎驥一の顔も見えます。背後のソテツは、1929(昭和4)年のキャンパス移転に伴い、上ヶ原に運ばれました。現在は高中部礼拝堂前に植えられています。さらに、宝塚の初等部にも移植されました。

5. ブランチ・メモリアル・チャペル -42歳(1904年) -



ブランチ・メモリアル・チャペルは、原田校地取得の際、資金を提供したアメリカ・ヴァージニア州リッチモンドの銀行家トーマス・ブランチの息子ジョンなどの資金協力を得て建設されました。設計はイギリス人M. ウィグノール。初期英国風ゴシック・スタイルの煉瓦造り平屋建てでした。関西学院初期の建築物として、かつての原田の森キャンパスに現存する唯一のもので、献堂式は、1904(明治37)年10月23日に執り行われました。

写真はチャペル内部。前列左より、吉岡、S. H. ウェンライト、(?), 松本益吉、長谷基一、村上博輔、吉崎彦一、W. K. マシューズ、M. V. ガーナ一。2列目にJ. C. C. ニュートンの顔も見えます。



Photo by Kurumi Takagi

6. 吉岡美国一家 -43歳(1905年) -



左より、長女美津、次女美知枝、妻初音、長男美清。妻初音は、長崎の活水女学校(現:活水学院)神学科第1回卒業生でした。活発明朗でありながら謙虚な女性だったそうです。「ライオン」というあだ名の吉岡が生徒たちに慕われたのは、行き届いた妻初音の働きに負うところが大きかったと言われています。

1899(明治33)年7月、初音の妹岡島まさは、夏休みも寄宿舎に残っていた生徒たちに頼まれ、合唱の指導をしました。これが日本初のグリークラブとして知られる「関西学院グリークラブ」(翌年吉岡が命名)の誕生につながりました。そのグリークラブが歌った最初の校歌”Old Kwansei”は、プリンストン大学の”Old Nassau”の一部を改編したのですが、歌詞の変更は吉岡によるとする説もあります。

長女美津は、吉岡の教え子で、後に第5代院長となった神崎驥一に嫁ぎました。美津の死後、次女美知枝がその後妻となりました。

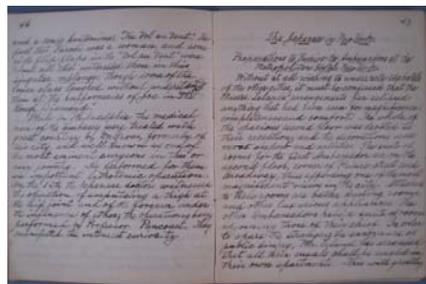
7. 正装した吉岡院長 -45歳(1907年) -



1892(明治25)年9月、関西学院第2代院長に就任した吉岡は、1916(大正5)年の退任まで24年の長きにわたって院長を務めました。これは、関西学院歴代院長の中で最長です。

吉岡は公私ともに寡言でしたが、その声は静かで軟らかく、太くて低く美しくと言われています。大のお茶好きで、神学部教員室のお茶が一番美味しいと言って、神学部でお茶を飲むのを好んだそうです。英語が達人だったとのエピソードには事欠きません。

「私の名を英語になおすと **LUCKY hill, Beautiful country** であってりっぱな名である」と語り、未だ珍しかった自転車を愛用していました。



8. 日露戦争戦捷記念碑 -47歳(1909年) -



日露戦争終結から4年後の1909(明治42)年3月10日、原田の森キャンパスに日露戦争戦捷記念碑が建立されました。関西学院関係者(在学生、教職員、卒業生、中途退学者、退職教職員を含む)総数が200名にも満たなかった時代、日露戦争に出征した関係者は13名もいました。

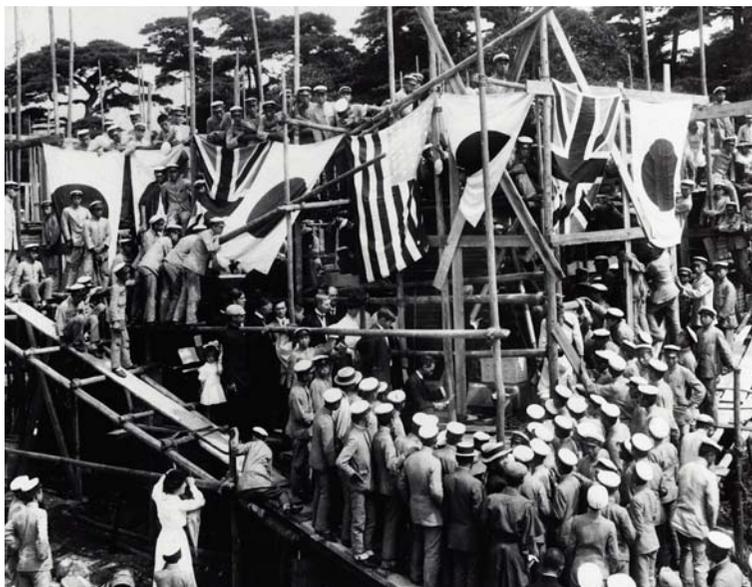
この記念碑は、キャンパス移転に伴い上ヶ原に移されました。現在、高中部礼拝堂東側の道に面して置かれている扇形の石(日露戦争出征者と記念碑建立寄付者の名が刻まれています)がその一部です。



Photo by Kurumi Takagi



9. 神学館定礎式 -49歳(1911年)-



アメリカの南メソヂスト監督教会が創立した関西学院の経営にカナダ・メソヂスト教会が参加することになり、校舎整備計画が立案されました。そして、3年前に専門学校として認可された神学部の校舎の建築が始まりました。これが、関西学院におけるヴォーリズ建築の最初です。

1911(明治44)年9月27日に行われた定礎式に集まった人々の中心にるのが吉岡です。中央の星条旗の左側に掲げられた日の丸の下には若き日のC. J. L. ベーツの横顔が見えます。左下には、父親のそばに行こうとする長女ルル、その様子に心配そうに見守るベーツ夫人の姿もあります。

完成した神学館の玄関に掲げられたのは、神学部創立以来のモットー「真理将使爾自主」の額でした。



10. 大隈重信来校 -51歳(1913年)-



1913(大正2)年11月26日、早稲田大学総長大隈重信が来校し、講演会が開催されました。大隈の右に立つのがC. J. L. ベーツ高等学部長、左がJ. C. C. ニュートン神学部長と吉岡です。関西学院普通学部が中学部に改称する際、文部省の認可を得るのに大隈の力があつたと言われていますが、それは、普通学部卒業後、早稲田大学に進学し、大隈に認められ、早大教授、政治家となった永井柳太郎の人脈によるものでした。

この年、神戸メソヂスト教会(現:神戸栄光教会)で吉岡夫妻の結婚25年の祝賀感謝会が開催され、「銀婚記念 敬神愛人 美国 初音…」と記された書と夫妻の写真が配られました。吉岡は「敬神愛人」という言葉を好みましたが、これが、現在までにその所在が明らかな「敬神愛人」の揮毫の最初です。



創立35周年記念式典(1924年)では、衆議院議員となった永井も講演を行いました。

11. 欧米訪問 -52歳(1914年)-



1914(大正3)年4月初旬、吉岡は日本メソヂスト教会の代表として、南メソヂスト監督教会総会に出席するため渡米しました。オクラホマでの総会の後、各地の教育事情を視察しながら懐かしいヴァンダビルト大学を訪問し、アメリカに留学中の教え子たち(中村賢二郎(左端)、元吉潔、大島高精。中村は、アフリカ伝道から帰国した W. R. ランバスと留学中に食事したことも書き残しています)と再会しました。これは、同大学ウエスレーホール(寮)入口で撮影された写真です。

北米訪問後は、大西洋を横断し、スコットランドのグラスゴーに渡りました。英国で第一次大戦勃発直前の不穏な動きを察知した吉岡は、パリ訪問を諦めベルリンに向かいましたが、シベリア鉄道経由の帰国が不可能となったため、ロンドンに戻り、大戦勃発後最初の帰国船に乗りました。9月28日、関西学院の教師・生徒が振帽拍手万歳で迎える中、吉岡は無事神戸港に到着しました。

12. 創立者ランバスを原田の森に迎えて -57歳(1919年)-



1919年(大正8)10月30日、関西学院を訪問したW. R. ランバスは、午前9時からチャペルで講話しました。午後3時には学生会館で歓迎会が開かれ、フランス、ドイツ、ロシアの情勢について語りました。その2カ月前には、神戸中央教会(現:神戸栄光教会)で説教に立ち、神戸で亡くなった父親の墓を大切に守ってくれている教会員に感謝の言葉を述べました。

これは、原田の森キャンパスで、創立者ランバス(中央)、第2代院長吉岡(左)、第3代院長J. C. ニュートン(右)が顔を合わせた貴重な写真です。



ニュートンが作った第一会堂(初期の神戸中央教会)
模型<神戸栄光教会所蔵>

13. 創立者ランバスの父の墓前 -59歳 (1921年) -



日本訪問中に発病した関西学院創立者 W. R. ランバスは、1921(大正10)年9月26日、横浜で亡くなりました。臨終の時、"I shall be constantly watching"という言葉を残しました。

10月3日、悲しみに沈む関西学院でランバスの告別式が行われました。



J. W. ランバスの墓(神戸市立外国人墓地)
Photo by Shigeru Shimizu

4日後、吉岡の胸に抱かれたランバスは、小野浜墓地(現:神戸市立外国人墓地)に眠る父親に別れを告げました。さらに、吉岡、J. C. C. ニュートン、W. E. タウソンの3人と共に上海に渡り、中国で伝道活動を続けていた妹夫婦に再会しました。

14. ニュートン第3代院長の帰国 -61歳 (1923年) -



1923(大正12)年5月15日、35年におよぶ日本滞在を終えたJ. C. C. ニュートン第3代院長夫妻がアメリカに帰国しました(左より)C. J. L. ベーツ、吉岡、ニュートン、松本益吉、T. H. ヘーデン、中村平三郎)。関西学院創立後わずか1年数ヶ月で日本を去ったW. R. ランバスに代わり、苦労を共にして来た大切な仲間との別れに際し、吉岡は横浜まで同行しました。

神戸港での見送りにには2,000人が集まりました(当時の関西学院教職員、学生、卒業生総数3,500名)。「周知の通り、本学は故ランバス監督によって創立されました。しかし、それを今日の姿にしたのはニュートン先生です。それゆえ、前者を實の父、後者をすばらしい学びの場に作り上げた、育ての親と呼びたいと私は思います。日本の古い諺に『産みの親より育ての親』と言います。ですから、私は個人的に、ニュートン先生を一層敬愛し、大切に思うのです」。

港に駆けつけた人々の手には、日英両文で刷り上がったばかりの『学生会時報』第7号(ニュートン老博士送別記念号)がありました。



15. 金婚記念 -76歳(1938年) -



1929(昭和4)年、関西学院の上ヶ原移転に伴い、吉岡は甲東園駅近くに住まいを移しました。院長の座を1916(大正5)年にJ. C. C. ニュートンに譲ってからは表舞台に出ることは少なくなりましたが、名誉院長として関西学院を支え続けました(関西学院には創立以来現在まで15人の院長が存在しますが、その内名誉院長は吉岡の他、C. J. L. ベーツ、小宮孝の3人だけです)。

ベーツ第4代院長時代(1920~40)、式典で教育勅語を朗読するのは吉岡の役目でした。



16. 西宮上ヶ原キャンパスの3院長 -78歳頃(1940年頃) -



C. J. L. ベーツ第4代院長は、太平洋戦争勃発前の1940(昭和15)年に院長・学長を辞任し、"Keep this holy fire burning"という言葉を教え子に託してカナダに帰国しました。上ヶ原キャンパスで撮影されたこの写真は、その少し前に撮られたものでしょうか。左端は吉岡の女婿でベーツのあとを継ぎ第5代院長に就任した神崎驥一です。

終戦後の1948年2月26日、吉岡は「附添う夫人はじめ家人一人々々に別れの言葉をのべ、最後に、学院のために、と特に感謝の祈禱を捧げ」た後、天に召されました(享年87)。

奏 換 終 頌		形 説 合 履 履 新		奏 美 新 書 美 新 書 美 新 書		奏 美 新 書 美 新 書 美 新 書		奏 美 新 書 美 新 書 美 新 書	
(遺骨返還)	55.8	55.8	55.8	55.8	55.8	55.8	55.8	55.8	55.8
司 式	一 田 鏡 一	司 式	一 田 鏡 一	司 式	一 田 鏡 一	司 式	一 田 鏡 一	司 式	一 田 鏡 一
一 同	美 麗 金	一 同	美 麗 金	一 同	美 麗 金	一 同	美 麗 金	一 同	美 麗 金
立 携 一 次	護 一 次	立 携 一 次	護 一 次	立 携 一 次	護 一 次	立 携 一 次	護 一 次	立 携 一 次	護 一 次

Ⅱ. 吉岡美国の遺品

1. 英文タイプライター



吉岡愛用の英文タイプライターは、ニューヨークのフランク・ランバートによって開発されたものです。一体型のキーボードに特徴があり、1902年に最初のモデルが発売されました。当初、基台部分に LAMBERT の文字が刻まれていたそうですが、吉岡のタイプライターにはこの装飾が見られないことから、改良が加えられた3型だと思われます。タイプライターが非常に高価であった時代、数少ない部品から作ることでできたランバート型は、価格面で需要があったのではないのでしょうか。

ランバート・タイプライターは、米国以外では、イギリスとフランスで製造されていました。興味深いことに吉岡のタイプライターにはスペイン語のラベルが貼付されています。スペイン語圏への輸出用に、ニューヨークで製造された英文タイプライターだったのかも知れません。あるいは、吉岡が中古品を手に入れたのだとしたら、元の所有者に関する情報とも考えられます。このタイプライターがどこで入手されたかは定

かではありませんが、海外で手に入れたとすれば、1914（大正3）年4月から9月にかけての欧米訪問時であった可能性が高いでしょう。

タイプライターは木製のケース（22 cm×34 cm×18 cm）に納められていて、簡単に持ち運びできる大きさです。

欧米にはアンティーク・タイプライターの収集家も多く、「祖父のタイプライターを修理して使えるようにしたい」と考える人も珍しくないそうです。吉岡院長のタイプライターについても、点検・修理の上、機器にあったインクリボンなどの消耗品を手に入れる方法が見付かるかも知れません。

このタイプライターは、1960（昭和35）年、神崎驥一第5代院長夫人より同窓会に寄託されました。

タイプライターの鑑定に当たり、ニューヨーク州在住のアンティーク・タイプライター研究家 Anthony Casillo 氏にご協力いただきました。また、スペイン語については、平山健二郎経済学部教授にご教示いただきました。ありがとうございました。

♪ 校歌「空の翼」誕生秘話 ♪

関西学院の校歌の中で最も歌われる機会の多い「空の翼」の作曲者山田耕柝は吉岡の教え子でした。吉岡の紹介状を携えた学生会長の訪問を受けた時、山田が校歌制作を快諾したのは、吉岡に対する深い敬愛の思いがあったからでしょう。

在学中の山田はいたずらっ子だったようです。教室のストーブで酒粕を焼いて食べ、院長室でひどく叱られたことがありました。「今後一切酒の香りのするものは口にいたしません」。山田は涙ながらに吉岡に誓いました。

それから10日ほど経った頃、寮の夕食に粕汁が出ました。断乎として箸をとらない山田の体調を気遣い、吉岡が優しく声をかけると、「先生への誓いを破れません」とやや切り口上に答えました。

「これは全く私が悪かった。どうか諸君赦してもらいたい。院長として山田君に酒粕を口にすることを禁じておきながら、今こうして、諸君と一しょに箸をつけてしまった」。こう言うとき吉岡は粕汁を片付けさせ、代わりに寮生全員に肉汁をご馳走したのです。そして、思いも寄らぬ顛末に泣いて詫言する山田を抱き起こし、「正しい事をやり抜くには、勇気がいりますねえ。今日は君に詫言しなければならぬのだ。さあ、もう泣かないで」と言いました。

山田耕柝『はるかなり青春のしらべ』より

2. ご夫妻胸像

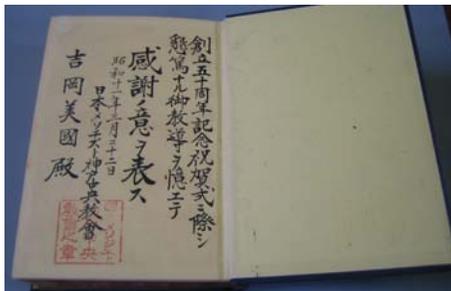


ご夫妻の胸像は、1934（昭和9）年11月27日に製作された鑄像で、胸像の背面に立体写真像発明者盛岡勇夫作と刻まれています。吉岡73歳、初音夫人71歳の時のものですが、何を記念して作られたかは記されていません。

大きさは、台座を含めても高さ30cmほどの小型のものです。残念なことに、吉岡の顔に数カ所、傷が見受けられます。

この胸像は、1960年11月29日、孫に当たる吉岡美和氏よりご寄贈いただきました。

3. 日本メソヂスト神戸中央教会創立五十年記念新約聖書



『我らの主なる救主イエス・キリストの新約聖書改訳』第4版、英国聖書協会、1935年。

日本メソヂスト神戸中央教会（現：神戸栄光教会）の創立五十周年記念祝賀式は、1936（昭和11）年3月22日、午後2時より354名の列席者をもって挙行されました。式次第の16番目に「記念品贈呈」とあって、前任教職7名、奉教満40年以上信徒44名の名が挙げられています。吉岡の名は前任教職の3番目に、初音夫人の名は信徒の12番目に書かれています。この時、信徒代表として祝辞を述べたのは仙台から招かれた鈴木愿太（写真）でした。鈴木は、南メソヂスト監督教会日本伝道開始にあたり、J. W. ランバスから頼まれ宣教師団と共に中国から来神し、通訳、県や市や警察との交渉、使用人の雇い入れ、必要品の買出し等、初期のランバス一家を最も身近で支えた日本人です。



記念の新約聖書は祝賀式の時に贈呈されたものと思われます。中には、長男吉岡秀倅氏（美清改め）の名刺が貼付されています。また、二つ折りされた「故吉岡美国関西学院葬執行順序」（17頁参照）と新聞の切り抜き（1931年4月28日）も挟まれています。

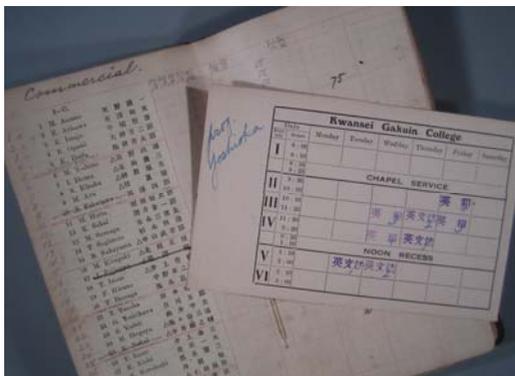
4. 拡大鏡



吉岡愛用の拡大鏡（直径60mm、長さ135mm）は、1960（昭和35）年11月、神崎驥一第5代院長夫人より同窓会に寄贈されました。吉岡が拡大鏡を使う様子について、ご令孫の岡田陽子さんと庄ノ敬子さんが「亡き祖父を憶う」と題して、『父の倂』（1958年、私家版）にお書きになっています。

「おぢい様は読書をなさる事が一番好きであった様です。毎月本屋から来る新しい本は一杯の本棚をなおも一杯にして行きました。その本棚のある洋間でストーヴに当りながら、又居間の火鉢に当りながら、夏には涼しい縁側のイスに腰かけて、本を読んでらした姿は何時もはっきりと頭の中に浮んで来ます。晩年には目がずっと悪くなられたために読むのに、大きな虫めがねで一字一字をひろい読みしていらしたものです。毎日朝食後に英字新聞を虫めがねで見ながら、流暢な発音で読んでいらした事も、おぢい様の英語と共に強く印象に残って居ます」(134頁)。

5. 出席簿



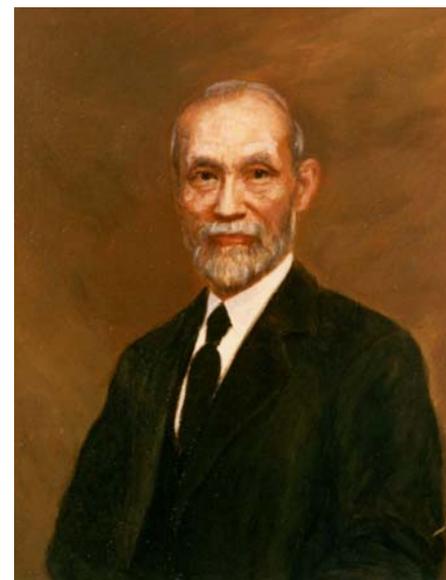
吉岡使用の出席簿(縦179mm、横94mm)は、創立初期の理事会記録や英語会(ESSの前身)会報 *The Maya Arashi* 等と共に2002年春、商学部宗教主事だった辻学助教授(現在は広島大学大学院教授)により宗教センター(現在の吉岡記念館。同館の命名発案も同氏)で発見されました。

井上琢智経済学部教授によると、記入されている学生氏名(岩橋武夫、寿岳文章等の名が見られます)から、1922(大正11)年または23年の出席簿と推測されます。中には、名刺やメモ書き、出講表等も挟まれています。



Ⅲ. 吉岡美国の肖像画と胸像

1. 肖像画



1927年 油彩 J.W.L. フォースター画

1927(昭和2)年12月17日、原田の森の中央講堂で行われた肖像画除幕式で、吉岡はこう語りました。「この肖像が存在する限りこれを見たならあそこに短所おゝここに欠点があったなどいふことが却って諸君の改良進歩に資することができると思ふ。感ずる所信ずる所あるも消極的に云へば欠点を再び繰り返さないでよりよき生のために見て下さってこそ私はうれしい」。

C. J. L. ベーツ院長の依頼を受け、肖像画を描いたフォースターは、学生が学校に寄附するものであることを知ると、1,200円の謝礼から200円しか受け取りませんでした。残額は「吉岡スカラシップ・ファンド」とされました。

肖像画は、吉岡記念館(西宮上ヶ原キャンパス)の階段踊り場に飾られています。

2. 胸像



1928年 ブロンズ 大熊氏廣作



*Yoshikuni Yoshioka, 1862-1948,
the second president of Kwansei Gakuin, 1892-1916.*

吉岡の胸像は、西宮上ヶ原キャンパス時計台1階に創立者ランバス像と向かい合わせに置かれています。両者を比較すると、ランバス像の眼差しが真っ直ぐ、あるいはやや上方に向けられているのに対し、吉岡像は、静かに下方に注がれていることがわかります。それは、愛する生徒たちへの慈愛に満ちた視線で、教育者吉岡の人格を映し出したものと考えられます（詳細は、永田雄次郎「大熊氏廣『関西学院監督ランバス銅像』および『関西学院名誉院長吉岡美国銅像』について」『関西学院史紀要』第11号、2005年をご覧ください）。

胸像の除幕式は1928（昭和3）年11月3日に行われました。

本冊子は、吉岡記念館開館時に開催された「関西学院を育てた人—第2代院長吉岡美国」展（2006.9.26~10.5）の「写真でたどる吉岡美国の生涯」と『学院史編纂室便り』第22号（2005.12.1）、23号（2006.5.1）に掲載された「吉岡美国院長の遺品」に手を加え、まとめたものです。下記URLからご覧ください。

http://www.kwansei.ac.jp/yoshioka/yoshioka_000655.html
<http://www.kwansei.ac.jp/gakuinshi/YOSHIOKA.htm>



July 25, 2012